



図2 ストック型社会とフロー型社会のまちづくり (島田信也先生提供)

まり、100年後の人たちに大きな遺産(レガシー)を贈ることができる。そうした誰もが未来に希望をもてるまちづくりを目指すのが、「ストック型社会」である(図2)。

人材確保・育成の成果が地域医療に貢献
～職場環境の改善と専門性を重視する病院の文化～

JCHO 熊本総合病院のみなさんはどのような想いで働いてこられたのだろうか。まず、副院長で地域医療連携室長を兼ねる古賀一成先生にお話をうかがった。古賀先生の専門は脳神経外科で、2010年同院に赴任し、それまで行われていなかった同科での手術を再開した。

「新病院で脳神経外科を立て直す役割を期待され、当院にきました。最初の2年間は脳神経外科の医師は私一人、365日オンコール体制で臨みました。赴任して4年後に新病院が完成します。今では脳神経外科の医師は私を含めて3人です。島田病院長が常々口にする『公のために一肌脱ぐ』『自分自身がかりたい医療を提供する』という言葉は、すべての医療者の行動を律してくれる規範であり、病院の文化になっています。旧病院が厳しい状況にあったとき、全職員の心が一つになれたのは、新病院建設という目標と、どんな医療を提供すべきかという方針が明確に示されたからだと思っています。まちの変化は5年、10年という長い目でみると明らかです。最近はずいぶんと活気が出てきました。本当に嬉しいことです。一方、当院には高度先進医療を地域住民に提供するという役割があります。2018年には手術支援ロボット『ダヴィンチ』の最新型を導入しました。専門性を高く維持する努力を常に怠らないようにしたいと思います」

八代市にある2つの基幹病院、JCHO 熊本総合病院と熊本労災病院は、お互いの得意領域を活かしながら高度急性期病院としての役割分担を図っている。地域医療連携室の職員同士の交流も盛んだそうだ。2016年に発生した熊

本地震では、熊本市や八代市のいくつかの透析施設も大きな被害に見舞われた。同院の腎センターではそれらの施設から透析患者さんを多く受け入れたが、その際にも地域医療連携室は活躍した。また、地元の医療機関との交流を目的とした「病診連携の会」を地域医療連携室では定期的に企画しており、室長である古賀先生は顔の見える関係づくりを大切にしていると語ってくれた。

薬剤部長の藤井憲一郎先生は、2007年に同院に赴任した。その頃は薬剤部でも退職者が後を絶たず、総員9人で長時間残業も常態化していた。藤井先生は業務改善を図りつつ、人材確保・育成面では薬剤師の認定・専門資格取得を積極的に奨励した。当初9人で10件だった資格・認定数は、2019年4月時点では総員20人で50件と県内トップクラスで、他県からも研修や見学に来院するまでに成長した。

「一つのことを極めるとさらに多くの関心が生まれ、専門性が広がります。そして、専門性を高めた薬剤師には学んだ知識を使える場が必要です。私は地元薬剤師の研修会や講演会の企画に携わっていた関係で、その講師・座長などの役割を当院の薬剤師に振り分けていきました。地域に出ていく活動は病院を代表するという誇りにつながり、薬剤師としての新たな成長を促します。一方、地域の薬剤師にも在宅医療などの現場で、服用期間を通じた薬学的管理が求められる時代になりました。当院では調剤薬局の薬剤師を対象とした院内研修の機会を設け、薬業連携の絆を深めています。また私たちは広報活動も重視しています。外部からの評価は個人や組織に自信と誇りをもたせ、さらなる専門性向上への意欲を生み出せるからです。こうした好循環を生む業務サイクルのマネジメントをこれからも続けていければと思います」

同院は2018年度に病棟の看護職員配置を10対1から7対1に変更し、翌2019年度には地域包括ケア病棟を新設した。そのため、看護部長の瀬高香澄氏には、2018年度に50人、2019年度にも50人の新人看護師を集めるという大きなミッションが課せられたという。

「2年で100人を集めるという大変な課題でしたが、何とか果たすことができました。熊本、鹿児島、宮崎、福岡と各地の看護学校を1年に30か所以上訪問しました。就職説明会などでアピールしたのは、新病院の設備や新人研修体制の充実でした。看護部でも専門・認定資格取得を奨励していて、現在、認定看護師は10分野で11人います(2019年3月時点)。この認定看護師が中心になり、毎年『看護・介護連携会』を開催し、地域住民の生活を支える看護が実践できるよう、看護・介護職の看護の質向上を目指しています。また、地域包括ケア病棟を新設したことで、

急性期から回復期を含めた地域包括ケアを推進し、JCHOの理念でもある安心して暮らせる地域づくりに、これまで以上に貢献できると考えています」

看護部では2018年以降、看護師の特定行為研修を3人が受講しており、修了看護師による訪問看護や在宅移行支援などの領域での活動も期待されている。

魅力あるまちづくりは日本の将来のために
～地域再生のため、まず医療の力を信じる～

最後に島田病院長に「ストック型まちづくり」が日本各地に広がる可能性についてお聞きした。

「端的に言うと、まちづくりにとって大切なのは、最初にわかりやすい形を示すことです。その意味で『美しいまちのモデル』は理解されやすい(図3)。既成市街地の建物一つひとつ新しく作り替えていくには時間がかかりますが、自分たちのまちを美しいものに変えていこうとする試み自体が一つの文化であり、何よりも住民の意欲と覚悟が問われます。もちろん自治体の協力も必要となるでしょう。しかし、考えてみてください。レガシーとなったまちの中心に集まれる広場があり、その周囲に市役所、銀行、郵便局、アーケード、学校など、生活に必要な施設が集まり、そこに医療や介護が受けられる施設があれば、そのまちの中だけで生活が完結します。これほど魅力のあるまちはそうはありません。まちを一回り散歩するだけで楽しいし、健康にもいい。こんな100年先を見据えたまちづくりの方針を病院が率先して打ち出していく。地域包括ケアや地域医療構想が目指したのは本来こういうものだったのではないのでしょうか。医療にはそれだけの力があることを信じてほしいですね。少子化が進む日本の人口は、2015年の約1億2,700万人から100年後の2115年には約5千万人になると推計されています²⁾。なんと6割の人間がいなくなるのです。それでは日本の社会はもちません。私はこれまで多くの失敗をしてきましたが、成功の反対は失敗ではなく、何もしないことだと考えています。今からでも遅くはない。日本の将来を創るために、『病院を核としたストック型まちづくり』をぜひ全国の医療者や関係者のみなさんに検討していただければと思います(図4)」

「医療とともに、公のために一肌脱ぐ」というJCHO 熊本総合病院の取り組みは、100年後の未来にレガシーを遺すという遠大な目標を立てたことで、人々の心を動かし、多くの賛同を得たのだと思う。余談だが、熊本県には、霊台橋、通潤橋、八勢目鑑橋、雄亀滝橋など、江戸時代後期から明治時代中期に種山石工たちがつくった数多くの石橋(眼鏡橋)が現存している。石の一つひとつ積み上げることで築かれたこれらの石橋は、100年の時を遙かに超えて



図3 まちなか病院を核とするストック型まちづくりのモデル (島田信也先生提供)



図4 適切に区画された「病院を核としたストック型まちづくり」の集合が、日本の将来を創る (島田信也先生提供)

地域住民の生活を支えてきた。種山石工発祥の地である八代市から「ストック型まちづくり」の思想が発信されたことに深い感銘を覚えた。

地域の文化に根ざした病院が多くの人たちを集め、新しいまちをつくる。この素晴らしいモデルに共感し、実現に向けて動き出す医療者が現れることを私たちが信じている。

文献
1) 一般財団法人医療経済研究・社会保険福祉協会医療経済研究機構編：医療と介護・福祉の産業連関に関する分析研究報告書—平成21年度厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業(政策科学推進研究事業), 2010.
2) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口(平成29年推計) —平成28(2016)～77(2065)年一冊：参考推計 平成78(2066)～127(2115)年。(http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_ReportALL.pdf) (2019年4月12日閲覧)

PROFILE
名称：独立行政法人地域医療機能推進機構 (JCHO) 熊本総合病院
開設：1948年(厚生省)(前身：健康保険八代総合病院)
所在地：熊本県八代市通町10-10
病院長：島田信也
病床数：400床